

蕉風俳諧變化表





春市
 灰栴
 八雀
 い栴
 遠美
 ほ月
 厂落
 家初
 一

	(花)	ウナ	(月)	フニ	(花)	(月)	ウ	(月)	(立)							
春	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	風	白	担	冬
春	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	雪	初	日
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	初	包	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	賣	炭	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	や	め	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	や	ら	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	蛙	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	木	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	い	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	袂	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	龜	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	道	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	好	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	豆	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	重	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	り	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	賣	
花	花	花	秋	月	秋	花	月	秋	秋	月	冬	冬	の	の	松	



月花定座頭書
 〇ノ中ニ印
 關中無字ハ雜
 同、印欠



附録北枝叟考
附方八方自他傳

硯下むうひはさくれ 柳? 自
梨の花さきき 柳? 夕方 自
鐘のあしおとろく 女ひとむき 他
箱の中の句人懐き時ハ自他をかりてけて句似す一
いつちう二替しても中の句を直方とて又さうり

送り火は尾のあそびやうきん 他
すつ風をくありのゆくす傍 端
さつりりと疎のさめいも暇屋一き 自
是も自他をかうけけりて但し面は分つき四五句も人懐
ちき句附るときは人句の一のちて附る次第のしあり

後尾あしを松と替りしる 端
くわん王のまきこる時この夢 自
抱く終のまきこるもけや秋山き 自
又

昔病の漸ふきさまれふくり 他
ケ振り人懐きき句一自の句附るときは其人の自の句を附
ともあまんと出て自の句よりこせるも抱いてせも思ひやせもよ
句似す一はか附さる一

並木あしをり松のちちる 他
入月は瘦子抱くも柳もくひ 他
つきひくもくぬぬ治る物かひ 他
うやうや他の句は他の句をむらして附るときは思ておる人ハ
あうありて二句とも又まといつて一む人備人懐のまもあ
なより一あ句の地をそ附る一

影のまきこる 柳の 赤 一のまき 他
是ハ其人のあしひきこるも物もくひの自他ハ附ぬものゆにまきこ
る人ハあま何りもまき人 又
雪のまき 送る 柳のまき 一き 自
是ハ抱めくひきこるも人の自の句あり是を自句ひといふ
は即附方也

あしききき種は布格のあてあり 自
いのちゆりたり 活外乃 未
又よりのまきつらうかとの女房達 他
ケ振る自の句は自の句附るときは其自の句の人ハ思ておるも相
いそぎも思ひやせもあけあの人と出たへ一是も自より他へ
うつら句似しよる考一はか附る一

茶のまつむ便をき 柳のまき 自
一云もつて日中乃 活外乃 未
二柳まき 松葉をまきあつらぬる 他
又

ちりりくと 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未
よしくち紙一はまきぬやうにエまき紙ハ替りていひまのり
む二句百よしく向あつらふ句似す一きめりはか附さるし

ひさのまき 未
よしくと 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未

あしきき 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未

あしきき 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未
あしきき 柳のまき 未

ちりりくと扇松ふきの 巻 他

あやうし白の白は他の向を又その白は他の白を向ををらぬ
よくしち紙へもくぬやうよまさ終ハ格一うきもの
む二白よくし向あやうし白は向へきぬはか格は格は

いふのあま本もつて 粽 結 他
ゆるくと流しむらりの下向反 入三三

かくのこく他の白は他の白向ひつる時ハ又他のあしひを
向ひつる時ハ又他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
人をあまありとあまあり 又

清ぬきあまひのちりりし 潔 自
うやうし白の白を向ひつる時ハ又他のあしひを
くしは実一二の結をあらうとて

無分あまあり 新のこさあま 入三三
あの中りれふさあまありとあまあり 自

かやうし他の白は他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
又あしひを向ひつる時ハ又他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
あまありとあまありとあまあり

様ちりりし 嫁のまきり 白 他
様しれぬ嫁も艶をせまつき 入三三
おろしりし 華て公より 咲ぬ 自

あは中の白と公より人として白の白附るあうりりく若くハ
はか附る

花ちりりし 心のちりりし 頼 他
さてもぞう保よさても 時 自

水上き懺悔くくとあまあり 他
かやうし白の白は他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
向ひつる時ハ又他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを

女の子ちりりしてすけひ子を 他
あまありとあまありとあまあり 自

かやうし白の白は他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
向ひつる時ハ又他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
ても格をぬる

梅ちりりし 凌げとゆかりのあまあり 自
あまありとあまありとあまあり 他

かやうし白の白は他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
向ひつる時ハ又他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
他の白を向ひつる時ハ又他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを

けまよひはか附るあまありとあまあり人情よく附込するあまあり
つし附をとりあまあり白は他のあしひを向ひつる時ハ又他のあしひを
時をさすのあしひの時分天ねると見合せ附るあまあり

返く未練也と縁修りきり言 自
おこ年々子更を以て言修りあるんりまの一法也後かや
他をさすのあまありの人はお付す一もさかハ秘すハ

元禄五年書

御書北枝

蕉翁七部集四季月花変化悉く等進二眼見ワタシ七部一説便ナリ
猶亦附方八方自他傳ヲ附録ナシテ初學ノ便リトナスナリ
蕉翁曰格ニ入リ格ヲ出サル時ハセタク又格ニ入ル時ハ邪路ニハシル格ニ入格
出テ初テ自在ヲ得ヘシ詩歌文章ヲ味ハ向上ノ路ニ遊ヒ作ヲ四海ニシラスナリ
以下略

蕉翁七部集四季月花之變化悉与等追二眼三見ワタシ七部一説傳
猶亦附方八方自他傳ヲ附録ナシテ初學ノ便リトナスナリ
蕉翁曰格ニ入り格ヲ出サル時ハセク又格ニ入ラザル時ハ邪路ニハシル格ニ入り格
出テ初テ自在ヲ得ヘシ詩歌文章ヲ味ヒハ向上ノ路ニ遊ヒ作ヲ四海ニクラスルナリ
以下略

明治十六年六月廿日出版願
明治十六年六月三十日發兌

福井縣平民 越前國丹生郡

校正

○、廣雪也

本保村十二番地

西京府平民

朝夕庵連梅

校正

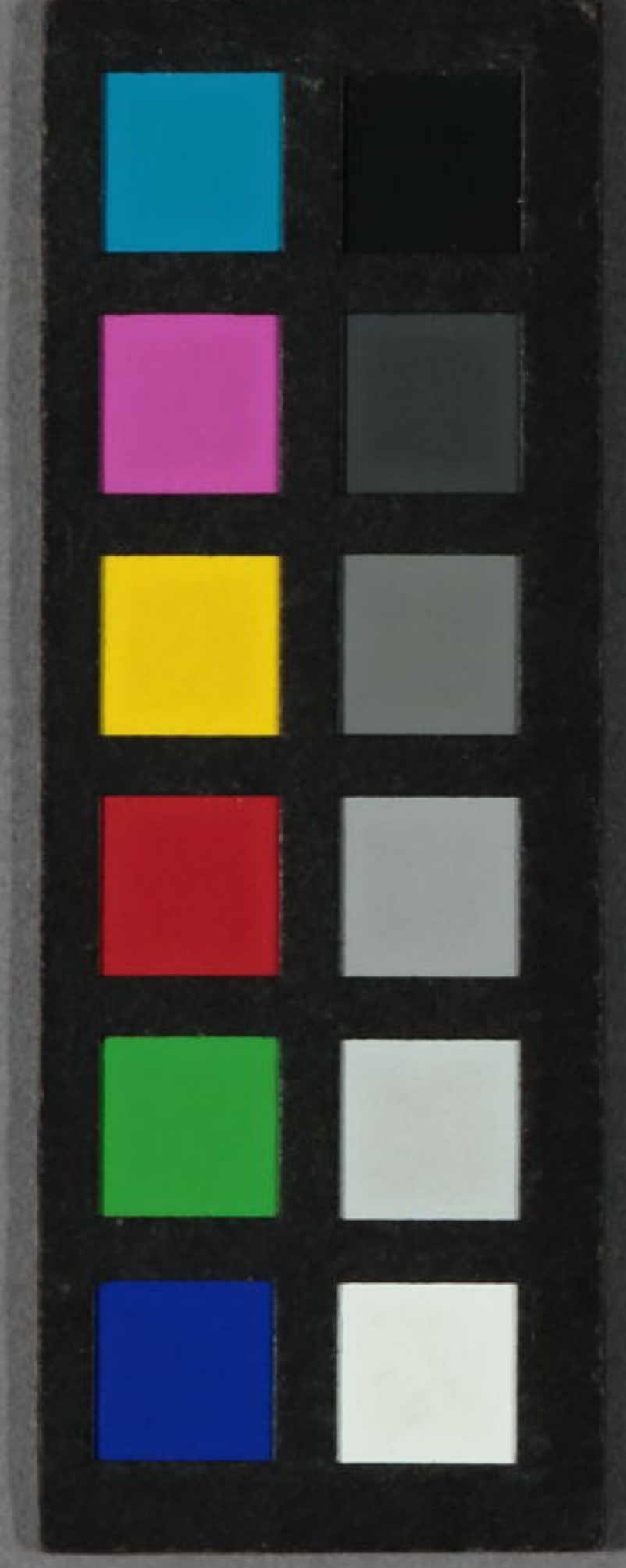
福井縣平民 越前國南條郡

編輯兼
出版人

黒田善次郎

武生桂町十二番地





蕉風俳諧變元表

庵雪也編輯

西軒藏版

